

# 1920年代の日本における女子陸上競技に関する歴史的研究

## －主に短距離走の技術論に着目して－

喜多綾音（筑波大学大学院）

### 1. 目的

本研究の目的は、戦前の日本における女子陸上競技の進展について、特に女子陸上競技が盛んに行われるようになった1920年代の女子短距離走に着目し、その技術論を分析することである。

### 2. 研究方法

歴史学的手法を用い、以下の課題を設定する。

- ① 1920年代の日本における女子短距離走のスタートから加速局面にかけての技術論を明らかにする。
- ② 1920年代の日本における女子陸上競技短距離走の、中間走からフィニッシュ局面にかけての技術論を明らかにする。

主な史料は以下の通りである。

- 寺田瑛（1923）女子の運動競技. 日本評論社.
- 人見絹枝（1927）女子競技（二）. アルス運動大講座, 第9巻, pp. 13-26.
- 三橋義雄（1924）女子競技. 広文堂書店.

### 3. 結果と考察

主な結果は以下の通りである。

- 1) クラウチング・スタートにおいて孔を掘る際は、女子は後孔を少し前に近づけて掘ることで、俊敏なスタートができると論じられていた。一方で、前孔と後孔の距離が遠く、後脚運動の距離が大きくなった場合は、女子は振り出し運動が十分にできないと考えられていた。これについて、当時、「女子は男子と比べて筋力が弱い」と考えられていたことを踏まえると、前孔と後孔の距離が広い状態で俊敏に後脚を前に引き付けることが、筋力が弱い女子には困難だと認識されていたからであると考えられる。
- 2) 女子が俊敏なスタートをすることは困難

であると考えられていた。その理由として、脚の関節が柔軟であること、足底の全面を接地して体重を支持すること、ピストル・ショットへの反応動作が遅く、脚部を前方に振り出す動作が俊敏でないこと、膝が内に曲がっていることが挙げられた。これらのことから、当時、女子がクラウチング・スタートに苦しむ理由として複数の論考が存在し、女子の身体的な性質がクラウチング・スタートの技術に影響を及ぼすと考えられていたことが明らかとなった。

- 3) 女子の腕振りには肘を直角に曲げて手は母指を外に出して丸め、腕に力を入れずに肩から体側に従って、前方はおよそ頬の高さ、後方は前方に振った手の角度と同じだけ振ることが望ましく、腕が敏活かつ、スムーズに振ることができると、脚の動作も円滑に行われると考えられていた。

### 4. 結論

以上のことから、1920年代の日本では陸上競技短距離走において女子に特化した技術論が存在しており、その多くはクラウチング・スタートに関する論考である一方で、フィニッシュ局面に関する論考は管見の限り存在していなかったことが明らかとなった。そして、それらは単に男子の技術を模倣したものではなく女子の身体的な性質及び、それに対する社会的認識を考慮した上で女子に特化したかたちで発展したことが、新たに明らかとなった。

### 5. 主な参考文献

- 1) 岸野雄三 多和健雄（1972）スポーツの技術史-近代日本のスポーツ技術の歩み. 大修館書店.